

第119号

発行 令和2年3月1日



秋田県立花輪高等学校  
同窓会事務局

〒018-5201 鹿角市花輪字明堂長根12  
TEL0186-23-2126 FAX0186-23-2137  
URL <http://www.ink.or.jp/~hanakoudousou/>

印刷 (株)成文社

花高同窓会会報



人生のふし目ふし目で  
出会った人々に感謝を込めて

元国立感染症研究所インフルエンザウイルス研究センター長  
元世界保健機関(WHO)インフルエンザ協力センター長

小田切 孝 人 (高校二四期)

論が大勢を占め、人々のワクチン拒否が激しく、メーカーも売れないワクチンの生産を止めていました。そんな状況の中で、新規のワクチン製造に挑む国内メーカーなどあるうはずもなく、万事休すでした。やる気満々で帰国した初っ端から大きな挫折を経験しました。

新規ワクチンのすべてを伝授して

くれた米国の恩師に報いるためにも夢を諦めなくなかったのですが、心機一転せざるを得ませんでした。そこで、医学博士の学位も取れたこともあり、留学させてくれた仙台の教室を離れて基礎研究と医学教育に方向転換することになりました。栃木県の自治医科大学で助手、大学院講師を十二年、石川県の金沢医科大学で助教授を三年やりました。

○国立感染症研究所センター長と  
世界保健機関センター長に就任

しかし、インフルエンザワクチンの研究の夢は諦めきれず、世の中が

ワクチンを受け入れ製造も順調に行われるようになった二〇〇〇年に、厚生労働省の直轄研究機関である国立感染症研究所にインフルエンザ担当室長として就職しました。この

から、国の健康行政のインフルエンザ対策に関わることになりました。その後、同研究所に新設されたインフルエンザウイルス研究センターに移り、二〇一四年からは第二

代センター長に就任し、併せて世界保健機関(WHO)のインフルエンザ

協力センター長にも就任しました。これにより、日本と東アジア地域(東南アジア諸国、中国、モンゴルなど)で起こる全てのインフルエンザの問題に対処する専門家側の責任者という役割を担うことになりました。海外出張が多く、いろんな異文化の生活習慣に触れる機会もあり、いい刺激になりました。

また、スイス・ジュネーブのWHO本部で開催される会議には日本代表として参加するのですが、英語を母国語とする欧米人が参加者の大半を占める中、彼らとの議論はジャングリシユ(Japanese-English)で応じる私には至難の業でした。でも、若い頃に海外追放された経験がここで大いに役立ちました。米国に留学させてくれた仙台時代の恩師や辞書を片手に会話する私に、幼児に教えるように根気よく英語の訓練をしてくれた留学先の恩師たちに感謝の念でいっぱいです。

私は二〇一九年三月に国立感染症研究所を定年退官し、国の仕事の一線から退きました。現在は、妻の故郷であり研究者として第一歩を踏み出した仙台の地に帰り、東北文化学園大学医療福祉学部教授として、学生の教育に専念しています。お世話になった数々の恩師たちへの恩返し

のつもりで、弱者が安心して頼れる医療スタッフを一人でも多く世に送りだせるよう人生の第二章を楽しんでいます。

卒業おめでとつ(ぎ)います。それぞれの道へ船出する後輩諸君の前途に幸あらんことをお祈りいたします。私は一九七二年卒で、入学当時は今の『あんとらあ』のある敷地に花輪高校がありました。校舎は一年生の途中で今の高台に移転されました。この度、人生のふし目を迎えたこともあり、事務局からの依頼でもあり寄稿させていただきました。私はこれまで四〇数年にわたり感染症の専門家としてインフルエンザワクチンの開発研究に携わってきました。子供の頃から未知の世界を覗いてみたいという好奇心とそんな仕事につきたいと漠然とした夢を持っていました。実際に研究の世界に身を置くことができたことは、幸運なことでした。

私は次男坊なので、自分の道は自分で切り開き食い扶持も自分で賄えというところで自由気ままにやらせてくれた親に感謝しています。また、人生のふし目ふし目で恩人ともいえる人々に出会えたこと、彼らの助言に従って将来の保障もない道へ躊躇なく踏み出したお気楽な性分も幸いしたのかもしれない。

長い研究者人生の中では、何度か試験を経験します。私の最初の『清水の舞台から飛び降りる』は、研究者の卵として所属した教室(東北大学医学部細菌学教室)の教授から米国ミシガン大学に留学することを勧められた二五歳の時です。海外に行ったこともなく、もちろん英語も話せない若輩者がいきなり海外追放というわけです。当時、その教室では海外留学のことを海外追放と言って、日本に戻るためには追放(留学)先で研究成果をしっかりとあげることが求められていました。同じ頃に海外追放された同年代の仲間たちは、妻子持ちもいてみな必死でした。多くは帰国でき大学に職位を得てその後に教授にまでなった人が多いのですが、中には米国に永住することになった人もいます。私の

米国の研究課題は、鼻から噴霧する新型のインフルエンザワクチンの開発への参画とそれを日本へ導入することでした。幸いにも順調に研究成果が出たので、二年で日本に戻ることができました。しかし、帰国した時期が最悪でした。その頃、日本ではインフルエンザワクチンの無効

(鹿角市花輪町出身)

### 聖火リレーに花高OB

東京オリンピックまで約六ヶ月。鹿角市の聖火リレーは六月一日で花輪商店街と花輪スキー場周辺の二つのエリアのコースで走り、ゴール後にはセレモニーが行われます。秋田県実行委員会は二月二十七日までに東京オリンピック聖火ランナーの一般枠に勝山(杉山) さゆりさん(高校三六期生)、推薦枠にオリンピアンの高橋(浅利) 純子さん(高校四〇期生)と松宮隆行さん(高校五〇期生)らを選んだことを公表しました。

勝山(杉山) さゆりさんは鹿角市市民センター職員でイベントの企画運営をしています。特にスポーツ関係が多く、町回り駅伝競走大会を一〇年間担当していました。現在は市民大運動会の担当を兼務しています。一般枠に応募したのは、微力ながらオリンピック聖火ランナーになることで、参加者が減少気味の大会の盛り上がり

に寄与することができるのではとの思いからでした。勝山さんは第一〇回ケーシヨンジャパン大賞の特別賞を受賞した、鹿角市を口ケ地に撮影が行われた「ディアン ドナイト」の炊き出しのサポーターでも活躍されています。

松宮さんは現在、愛知製鋼の選手兼コーチですが、二〇〇八年北京オリンピック男子長距離トラック日本代表、男子五〇〇〇メートルの元日本記録保持者、三〇キロメートル競走の元世界記録保持者として大活躍をしています。

高橋(浅利) 純子さんは現在、

鹿角の学校の陸上の指導者として活躍していますが、一九九六年のアトランタオリンピックのマラソンに出場、一九九三年の世界陸上など四度の世界大会で優勝しています。オリンピックの出場前には一日で四〇キロ、一か月間でおよそ二二〇〇キロを走っていたとい

ます。聖火ランナーの決定について、「今も、オリンピックに携われるのはうれいしですね。歓声のなか、トップでゴールテープを切る、あの最高の気もちを味わいたくて、トレーニングしていましただけに、オリンピックはメダルを取りたかった。今回の聖火リレーランナーは皆さんがイメージしている選手時代のように軽やかに走りたいと思っています。オリンピックには数えきれない選手が挑戦しているし、それら選手一人一人には大勢の支えがあります。地元に限らず、各国の選手を応援してほしい。」と話しています。

(文責 編集部)



### 花高健児に告ぐ

尾去沢中学校長

駒木 利浩 (高校三四期)



約四〇年前、花高の門をくぐったときに、今の自分を想像することができたであろうか。それは否である。これと定めて目標を追い求める若者もいるが、私の場合、卒業とともに自分探しの旅(どのような仕事に就きどのような人生を歩んだらよいのか)が自問自答が始まったことを覚えている。旅の出発点は言うまでもなく生まれ育ったふるさと花輪そして母校花高である。

岩手県二戸郡出身の祖父和吉が花輪の街に店を開いたのが昭和一〇年であった。花輪線姉帯駅から北上して北海道まで渡った祖父が、その間最も栄えていた街として花輪に店を構えた。当時の花輪は多くの鉱山に囲まれ、その恩恵を大きく受けていたという。とりわけ昭和三〇年代後半は増えに増えた子どもたちで溢れかえっていたという。第三四期で卒業した我らも、一クラス四五名、A組G組までの七クラスで三年間を過ごした。

時代は昭和から平成、令和へと変わり少子化も加速、ついに我が花高を含む鹿角三高校の統合が本格化する事になる。人々の価値観が多様化してきている昨今、生徒個々が自分探しをしっかりとできる環境を、統合校には期待している。ふるさと鹿角で教職に就き、既に

三〇年以上が経過している。AIの発達や突然の自然災害、予測困難な次代にあつて、生徒たちに呪文のように唱え続けていることがある。それは「自らが考え、自らが判断し、主体的に生きる」力が必要であること。「失敗や間違いを怖がらない」挑む心をもつことである。

花高健児に告ぐ。自ら考え判断し未来を拓け。花高健児に告ぐ。失敗や間違いを経験とせよ。花高健児に告ぐ。オンラインワンで予測困難な次代を生き抜け。

近くにあれ、遠くにあれ、われら同窓にとつて青垣山をめぐらす花輪、そして花高はふるさとであり、同窓、同級生らと過ごした高校時代は心のよりどころである。後輩たち自分探しの旅を心から応援するとともに、ふるさとに愛着と誇りをもつて旅を続けてくれることを期待したい。

### スキー部の活躍とスキー競技の今後

秋田県議会議員

花輪高校スキー部OB会

会長 児玉 政明 (高校四二期)



今年(二〇二〇)オリンピック・パラリンピック競技大会が開催され、世界から日本が注目される年になると思いますが、(二月一〇日現在)本県関係選手の出場内定者は、カヌー競技において角館高校出身の佐藤綾乃さんが県勢として第一号となつております。五六年ぶりに東京

で開催されるオリンピックのひのき舞台へ、花輪高校出身選手の出場が期待される種目もあることから、今後の選考試合で大いに活躍されることを願っております。

一方、我がスキー部においては今シーズンの妙高インターハイにて、コンバインド競技で優勝するなど、数多くの入賞者や部員の活躍にOB会としても喜んでるところです。これも同窓会をはじめ、部活動後援会、教職員の方々、多くの地域住民のご支援があつての事と御礼を申し上げます。さらに今シーズンは、男子のコンバインド選手がワールドカップへの参戦、女子のランナー選手がユニバーシアード大会へ出場など、日本代表として国際大会で活躍する選手もいたことから、次の二〇二二北京冬季オリンピックへの出場も期待されます。

さて、鹿角市の花輪スキー場では今年から三年連続でインカレ、来年から二年連続で国体スキー競技会が開催され、花輪高校スキー部の現役選手、OB選手の活躍が期待される場所です。しかし、年々減少するスキー競技人口の底辺拡大が課題となつており、中高生の全県大会は少ない人数で開催され、将来的な大会の開催が危ぶまれているところです。これは全国的な傾向になっているようですが、人口減少が進む本県においても各競技団体共通の課題ではないでしょうか。先ずは小中学生のジュニア期において、スポーツに取り組みきつかけ作りや高校生や社会人選手と合同練習等による連携が団体毎に求められると思います。また、スキーに関しては、スキー教室が行われていない沿岸部の小中学校に、スキーに親しむきっかけとなるような

授業でのスキー教室の開催や、トップクラスのスキー選手が県内で働きながら競技を続け、将来的には指導者として次の選手を育成する、強化システムの体制を構築することにより、競技人口の底辺拡大につながるものと思っております。

今後、全国クラスの大会の開催が花輪スキー場で続きますが、地元への経済波及効果の期待と共に、地元選手への更なる競技力向上への活躍を期待し、スポーツで秋田を元気にしたいと思える選手、関係者、住民の力の結集にご協力をお願いいたします。

児玉さんは昨年の秋田県議会議員選挙において見事トップ当選され、現在、県議会議員として活躍されております。

（株）かつのパワーの設立

（株）かつのパワー代表取締役

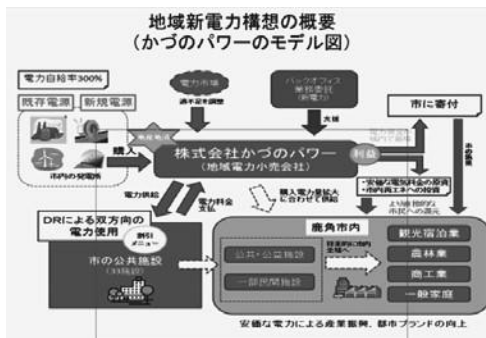
竹田 孝雄（高校二十期）



東日本大震災の時に、鹿角市の停電からの復旧は遅かった。市内に多くの発電所があるのに何故、そんな疑問が今回の「かつのパワー」事業の起点です。市は市内の電源の電気を市内で優先的に使うことができないか検討を始めました。その結果、鹿角市には地域電源つまり地域資源の活用、また、今話題の脱炭素エネルギーへの変換、さらには、できるだけ電気代を安くできないかの、二兎ならず三兎を追

うことができる可能性があることに気づきました。市内には古くから水力発電所があり、また、地熱発電所、風力発電所もあります。最近は大規模になり、太陽光発電所も目につくようになり、二〇二六年から電力小売りが全面自由化され、これまで独占されていた電気の小売事業に誰でも参入できるようになりました。また、その事業を支える電気の卸売市場が整備され、多くの小売り事業者が設立されています。再生可能エネルギー電力を取売するために再生可能エネルギー電気を発電している事業者の電気を送配電事業者から購入する必要があり、これは送配電事業者と特定卸供給契約を結ぶことで可能になります。かつのパワーは三菱マテリアルと永田発電所の電力を使用する協定を結び、特定卸供給契約を、送配電を行う東北電力と結びました。市はこれら電力小売事業化の環境が整ったことを活用して、電力小売事業に参入することを決めました。

（株）かつのパワーは市と金融機関、さらに、鹿角地区の民間企業の出資によつて昨年七月に設立されました。今年の四月からの事業開始に向けて準備中です。事業初年度の今年度は、市と市の関連施設合わせて三十二施設に電気を供給する計画です。この電源は主に、三菱マテリアルの永田発電所の電気ですが、不足分は電力卸売市場から調達します。電気は貯蔵が難しいので、刻々と変化する需要に合わせて調達する必要があります。この同時同量に調節する作業は供給先に設置している電力計と発電側の電力計を常にモニターして合わせる必要があります。この作業は当然コンピューターを使い自動的におこないますが、



秋田県たるた協会会長 土田(村山)敦子（高校三五期）

「ちはやふる」の世界へ

私が花輪高校に通っていたのは、今から四〇年前になります。花高時代は、楽しかった思い出の方が多いですね。どちらかと言えば前向きな性格です。あまり後悔することのない人生でしたが、ひとつだけ「たられば」的なやり残した事があるとすれば、花輪高校の部活に「かるた部」があったならば、私の高校生活も全く違う物になっていたでしょうねえということですね。当時は、化学部に所属しておりました。それなりに充実もしておりましたし、その先の薬科大進学のみっかけにもなりました。現在の薬剤師という職業にも繋がっています。後悔は全くありません。最近では、映画「ちはやふる」で競技かるたの存在が世間に知られることとなりまして、ここ数年は高校のかるた部が全国的にも増えました。そして今の秋田の現状を考えると、自分の時代にもかるた部があったら、どんなによかっただろうと想いを馳せるのでした。

私が生まれ育った地域は、子供会行事も盛んでして、夏は花輪はやしの大鼓、冬はかるた(百人一首)の練習をしておりました。小学生の頃から親しんできたかるたでしたが、鹿角を離れてからは、ずっと遠ざかっておりました。大学を卒業し、秋田市の病院に勤務し、結婚し、子育て真っ最中かと思いついてかるたを再開することになりました。今から一〇年前くらいでしたが、二五年ぶりに再興しました。競技かるたの世界は、昔自分が遊んでいた頃のそれとは全く別世界の物に進化しておりました。各地で開催される全国大会で各級三位入賞することにより、昇段していくシステムも知りませんでした。今はまたその過渡期でもあります。競技かるたは、老若男女対戦できますし、いつから始められてもそれなりに楽しめる数少ない競技です。合同練習会では、小学生から八〇代まで一緒に練習しております。ねんりんピックでは一〇〇歳の方もいらつしやいました。それぞれ目指すところは違いますが、一度覚えてしまえば全国どこに行っても楽しんで練習に参加することができるでしょう。数年前までは、秋田での全国大会の開催は夢の話でしたが、二〇二四年の国民文化祭の際は、「こころ」かるたの里鹿角で「小倉百人一首かるた競技全国大会」も無事開催され、次いで協賛イベントとしてのねんりんピック「秋田百人一首かるた交流大会」も二〇二七年に再びここ鹿角で開催することが出来ました。そして、この二つの全国大会開催で高評価を得たことが自信となりまして、秋田県かるた協会長年の念願でもありました「第一回全国競技かるた秋田大会」を二〇二八年に再びここ鹿角で開催するに至ったのです。これには、花輪高校OB&OGを含めたメンバーの活躍があったことは間違いありません。現在、秋田県の高校でかるた部の存在する高校は二校のみです。かるたの甲子園の近江神宮に行けるのは代表校一校だけですが、予選の段階で二校からの選抜と言つのはとても残念な現状です。秋田県かるた協会としては、秋田のレベルアップのためにも、高校かるた部がもっと増えていくことを夢見ております。

「人口減少化社会」

十和田八幡平観光物産協会  
会長 千葉 潤一 (高校二九期)  
(龍門亭千葉旅館 六代目館主)



二〇二〇年一月一日現在、鹿角市の人口は三〇四五四人、小坂町は四九九五人、圏域合計三五四九人とのこと。ピーク時には圏域でおよそ八万人の人口を有しており、まずはリアリティをもって人口減少化社会の現実を直視したい。

だが昨今、我が国における人口問題は極めてネガティブな捉え方で論じられ、特に若い世代に対し将来不安を煽っているかのようには見え感じられる。そもそも人口というのはメガトレンド、日本の人口が減少していくことは二〇〇〇年の抗うとできない長期的な潮流であり、今さら大変だと言つて小手先の対策を講じて解決できる問題ではない。これを直感的に大変だと言っているのは定常状態に落ち着くまでのプロセスのことであり、社会保障費の増大で財政が逼迫するとか、人手不足で企業経営が立ち行かなくなるとか、そんなことは前から分かっていたことで、これからのいよいよ顕在化していくということだけであろう。ポジティブに考えるなら、決して広くはない国土の七〇%が山間部で

あり、エネルギー資源にも乏しい我が国においてそもそも一億二千万の人口は多過ぎはしないか？七、八千万人で定常状態となつてこそ顕在化するアドバンテージは必ず存在するはずである。労働市場においても、あの就職氷河期のように「何でもいいから雇つて下さい」という状況は経営を弛緩させてしまつわけて、理想論ではあるが、むしろ「求人難」という状況の方が経営革新や生産性向上、品質向上を生み出すエンジンとなりうるものである。

ここで信じるべきは、日本という国家とその国民が有する本質的な国力、レジリエンス、「復元力」であり、明治維新しかり、戦後復興しかり、これまでも見事なまでに困難を乗り越えてきた。

そして、一人当たりの豊かさが国力の指標であるなら、分母が小さくなること自体には何の問題もなく、考えるべきは人口減少を前提としてポジティブに未来を描けるか否か、本気で社会を変革しようとするか否か、であろう。

街の画家！

鹿角市の遠藤巨人さん(高校四二期)のお店のシャッターに花輪高校の新人画家が絵を描きました。絵で街の賑わいを起こそうとの遠藤さんの思いが始まりですが、銀河鉄道を思わせるすてきな絵に仕上がりに、街に芸術の香りが漂います。前途有望なる新人画家の登場に拍手を！商

店街の発展に力を！

(文責 編集部)



令和2年度 総会開催のご案内

日時：令和2年5月9日(土)  
18:00～  
場所：鹿角パークホテル  
会費：4千円  
申込：0186-23-2126

催し物のご案内

今年吹奏学部のコンサートや西村公一さんの「鹿角地域内エコシステムの構築」の講演を予定しております。ぜひ参加してください。

おくやみ

元同窓会長 現顧問 石井トシさん



石井トシさん(高女第六期生)が令和二年二月二日なくなられた。享年一〇二歳。昭和九年(一九三四)花輪高等女学校を卒業し教職に就き学校教育の充実と子供たちの育成に努めた。同窓会長、顧問を務められ会員の敬愛を集められた。五〇周年記念式典での花輪高等女学校校歌「愛の花輪」(作詞 北原白秋 作曲 山田耕筰)および花輪高等学校校歌の指揮については語伝えられている。合掌 (文責 関厚)

おくやみ

元同窓会長 現顧問 元鹿角市長 杉江宗祐さん



杉江宗祐さん(高校第一〇期生)が令和元年十一月二十九日なくなられた。享年八〇歳。花輪高等学校を昭和三四年(一九五九)卒業後、昭和六三年から三期一二年間鹿角市長を務められ、①都市整備、②花輪スキー場と総合運動公園の建設、③シヨブロン市などの交流、④農業や商工業の振興などに取組まれた。平成一五年(二〇〇三)県会議員を務め県勢の発展に寄与された。同窓会長として斬新なアイデアで数々の事業を推進し同窓会の発展に寄与された功績はおおきい。会長退任後も会の発展のために尽力された。合掌 (文責 関厚)

～聖火ランナー～

東京オリンピックまであと半年となり、今、市内では聖火ランナーの話で持ちきりとなっている。鹿角市からは、アトランタオリンピック代表の浅利純子さんと北京オリンピック代表の松宮隆行さんと一般枠の勝山さゆりさんが選ばれ花輪高校出身者だけでなく、市民の中で喜びの声が上がっている。

昨年NHK大河ドラマで昭和三九年の東京オリンピックを取り上げたことで、当時高校一年生であった私達同窓生は、当時の思い出話に花を咲かせている。



校舎は現在のあんとらあにあって狭いグラウンドで全校生徒が「東京五輪音頭」を踊ったのは今の高校生にはイメージできないと思う。

男子生徒が仕方なく踊っている姿を思い出すたびに笑いがこみ上げてくる。

昭和は遠くなりにはけりだが、平成を経て令和の時代に二回目の東京オリンピックを肌で感じることに感慨深い思いと期待で胸がいっぱいになる。

花輪高校出身の浅利さん、松宮さん、勝山さん、三人の聖火ランナーの勇姿に市をあげて沿道から声援をおくろう。

吉村 アイ (19期)